

## 本会元理事長 佐伯 富先生を偲ぶ



本会の元理事長

佐伯富先生は、二

〇〇六年七月五日

に老衰のため逝去

された。享年九五

歳であった。ここ

に謹んで哀悼の意

を捧げる。

先生は一九一〇

年（明治四三）一

佐伯富先生を偲ぶ

一月六日、香川県にお生まれになり、三豊中学校、第六高等学校をへて、一九三五年（昭和一〇）京都帝国大学文学部史学科東洋史学を卒業された。卒業後は、東方文化学院京都研究所研究嘱託、東方文化研究所助手、京都帝国大学人文科学研究所助手として研鑽を積まれ、一九四二年、山口高等商業学校の山口経済専門学校教授になられて、戦中戦後の苦しい生活のなかで研究に精励された。一九四九年（昭和二四）京都大学文学部助教授に就任、一九五七年に教授に昇任され、東洋史学第三講座を担当されて、主に中国近世史を講じ、多くの人材を育成された。その間、本会の評議員、理事を長年つとめられて、会の運営と発展に尽力され、一九七三年理事長になられた。その翌年四月、停年により京都大学を退官、京都大学名誉教授の称号を受けられ、一九八三年には、

長年の功績により勲三等旭日中綬章を受章された。退官後、台湾大学に一年間出講され、七九年から八一年まで大谷大学特任教授をつとめられた。非常勤講師としては、皇学館大学、大谷大学、京都女子大学に出講された。

先生の専門は中国史学であり、宮崎市定先生に師事されて、宋から清にいたる中国近世史を主たる研究領域とされた。中国近世は独裁君主政治が行われた時代であり、「その権力構造、経済的基盤、さらには独裁君主が社会、経済、文化などに及ぼした影響などを追求すること」が、先生の一貫した研究目的であった。そこで「宋代の皇城司に就いて」を皮切りに、近世の制度史、社会経済史の分野で斬新で実証的な論考を相ついで著して、学界の注目を集められた。それら数々の業績は、『中国史研究』第一から第三に収録され、第三には名著『王安石』も含まれる。

先生は卒業論文に宋代の茶法をえらばれ、東方文化研究所ではその史料収集に従事されて、『宋代茶法研究資料』を編纂されたが、その仕事を終えると、茶法から塩法―塩の専売制度の研究に進まれ、これをライフワークと定められた。一九四三年に著された「塩と支那社会」は、中国史上の塩の役割を総説した好論文として高い評価を得た。研究は現代に近い清代から始められ、一五八八年に『清代塩政の研究』を上梓し、ついで明代元代へと時代を遡って、一九八七年、古代から清末にいたる塩政の変遷を明らかにした大著『中国塩政史の研究』を著された。これこそ先生畢生の大業であり、世界で初めての中国塩政通史である。この研究に対して、恩賜賞・日本学士院賞が授けられた。

先生は研究のかたわら、各種の索引類を編纂されて、ひろく研

究者の便益に供された。その数は、公刊のものだけでも四十種に近い。その一、二を挙げよう。中国の筆記小説類の目次、項目を採録配列した『中国随筆索引』（共編）、『中国随筆雜著索引』はともに一千頁を超える大著であり、国内外の学界から高評をえた。『宋史職官志索引』はじめ『宋史』刑法・兵・河渠・選舉の諸志索引は、もともと先生が長年講じられた大学院演習『続資治通鑑長編』を講読する必要から自分用に作られていたのを、その後順次刊行されたもので、いずれも宋代史研究者の必携書となっている。史籍以外では、『宋代文集索引』『雅俗漢語訳解』などがある。これら大部分の索引は、カード採りから最後の校正まで、ほとんどすべて独力で行なわれたものであり、その不断の努力には全く敬服のほかはない。

先生は在職の二五年間、学園紛争の一時期を除いて、毎日朝早く、決まった時間に研究室に入られ、夕方の帰宅の時間もほぼ決まっていた。しかも、日曜日も休暇中も休まれることは少なかつた。そうした先生の研究態度は、学生たちによい刺激となり、当時は休日にも研究室に出てくるものが少なくなかつた。若い者の研究に一々口出しされることはなかつたが、よく「論文を書いてますか」と、それとなく鼓舞されていた。実証を重んじられる先生は、史料の扱いについて厳しく、論文諮問では、引用史料を詳しく原典と照合して、引用の誤りを一つ一つ指摘され、誤字も見過ごされなかつた。平生は言葉少なく、近寄りたがたい感じだったが、毎週金曜の東洋史研究室での昼食会では、先生もくつろいで学生時代の思い出など楽しげに話され、温厚なお人柄に触れることができた。

退官されても、晩年にいたるまで同じベースで論文を書き索引を作られた。二〇〇二年一月、王応麟『小学紺珠（卷八職官類）索引』（手稿コピー版）を作成され、わたしも一冊頂戴した。それに添えられた短信には、次のように記されていた。

……拙著王応麟『小学紺珠』は二年前に始めましたが病気で進捗しませんでした。がやっとできましたのでお目にかけます。目の手術直後でコピーの訂正がま、ならず甚だ不本意なものとなりましたが御諒承下さい。二月十六日 佐伯富

これにはもはや何のコメントも無用であらう。心からご冥福をお祈りする。  
(竺沙雅章)